

褐、赤褐、チヨコレート、或は栗粉を呈す、又南洋諸島近海で得られるもの、中に膠質狀で粘着力を有しない極微粒のものがある。此の堆積物は全く生物遺骸を含んで居ないこともあるが、一般には甚だ少量を含む、然し、紅色粘土とグロビグリーナ軟泥との區別は炭酸石灰の三〇%の含有量を境界として定めてあるから紅色粘土の標本の中には非常に多量の生物遺骸を含むものもある。標式的紅色粘土は石灰質生物遺骸は含有せず只砂質殼有孔虫、放散虫、海綿の骨片等の珪質生物遺骸を僅に含有する。礦物としては浮石及火山玻璃の破片が最も多く、其の他長石、風信子鑛、角閃石、輝石等が普通で時に滿掩の團塊を混入することがある。本堆積物は北太平洋南西部の總ての海底堆積物中最も廣い分布を有し、四千米を越す深海底は殆ど全部紅色粘土で蔽はれて居る、此の堆積物は深度の減少に従ひ漸次グロビグリーナ軟泥或は藍色泥に移化する。

8、放散虫軟泥 チヤレンジャア及アルバトロツス號は管てグラム海溝中の南西端附近の深海から放散虫軟泥を採集したが、今回の材料中には同所からの採取物がなく又二〇%以上の放散虫を含有するといふ標式的放散虫軟泥の材料も存在しない。即ち北太平洋西部に於ける該堆積物の分布は可なり限定されてゐるらしい。

今回の材料中には紅色粘土とグロビグリーナ軟泥の中間體或は紅色粘土と藍色泥との中間體が少くないが、各種の堆積物は分布の境界線が明瞭なものが無く漸次に互に他のものに變

り變るものである。軍艦滿州で使用して居る測深管は長六十糎で此の中に採取されて来る堆積物の材料は通常二十五糎位の長さで、最長のものは四十五糎位である。而して一般に一回の測深に際し測深管に進入つて来る材料は一種であるが時に二層の異つた堆積物が累なつて採取されることがある。例へば上層が紅色粘土で下層が藍色泥の場合或は上層が細粒の藍色泥で下層が粗粒の藍色泥の場合等であり、兩層の境界は一般に明瞭である。

(本報告には附圖として北太平洋南西部底質分布圖が添へられて居る。其の範圍は赤道より北緯三五度二十四分に至り、東經百二十度より同百八十度に至る。この廣い區域の海底沈積物の分布が判然したことは日本地學界の爲めに慶賀すべきことである。)(S)

新著紹介

○人文地理學研究

小川琢治著 昭和三年八月發行

古今書院 定價二圓

本書は序文にある通り一卷の纏つた人文地理學としての著述でなく地學雜誌や地球などに出版された先生の著書に傾けた人文地理學上の數個の問題を解説されたものと見てよい。筆者は親しく先生の教をうけて、先生から越中の莊宅や、大和河内に存する垣内式村落といふものを教はり、はじめて我國の聚落地理學の進むべき途を學んだものである。蓋し本書はさ

うした人文地理學を我國に於て創設した論文の集りとみて差支へぬと考へる。筆者は拙著日本民家史についての恩師の懇到なる批評が本書の第二篇中に收められてゐることに、心からの感謝をさぐるものであると同時に、讀者が本書の第一篇科學としての地理學とその學說の標式的説明とも見らるゝ近畿の土地と住民との二篇から多大の學ぶべきものをつかまれるであらうことを期待する。四六版二百八十二頁、索引附録の平江圖がいかにもふるつてゐることを附記する(藤田)

○支那歴史地理研究

小川琢治著 昭和三年八月五日
發行 弘文堂書店 定價三圓五十錢

本書も亦小川教授が二十年來諸雜誌に發表された支那の歴史地理に關した論文十二篇を集めたものである。第一章支那地圖學の發達、第二章第四章山海經に關したる研究、第五章禹貢、第六章天地開闢及洪水傳説、第七章戰國以前の地理上智識の限界、第八章崑崙と西王母、第九章地震の神話と傳説第十草本草學、第十一章松花江の水源地、第十二章歴史地理の地名學的研究、凡そかうした論文は實は博士の獨境であつて涉獵が廣くて、和漢洋の三學に通じた人にしてはじめて能くする所のものである。支那學者に是非共一讀をすゝめる。地理學者としても東洋地圖學の發達を知らんとする人には本書の如き絶好の指針は外にない。漢文のよめない人に本書はやゝ讀解が困難であるとは信するけれども、東洋の人文地理學を學ばんとする人々は、最初にかうしたものを讀破理會しな

くてはならぬ。菊版四百四頁三十三字詰十四行、印刷鮮明、以て讀者の書架を飾るに足るであらう。(藤田)

○世界地理の史的考察

三村信男著 菊版六〇〇頁
索引二一頁 昭和三年七月 東京神田大同館書店發行

正價四圓八〇錢

世界の現状を記述するのが世界地誌ではあるが、現状を知らんが爲めには或程度まで過去を知らねばならない。本書は此の目的に適ふように世界各國並に其の領土の沿革を記したものである。既に現状の依つて來る所以を知るのが目的である故、古きは簡に、新しきは詳に述べ、殊に世界大戰の結果は世界的に領土に大變動があつたから此點に留意して、其の版圖變移の由來する事情を明にしてある。章を分つ十九、全世界の國々を漏れなく擧げ、其の説明は極めて平易であつて難解の箇所などや、前後撞着する所などは殆んどなく、全く手際よく編述されてある。トルコの現状を概説して、「ホスホロス海峡の波は昔に變らず靜かであるけれども、半月の旗の色は時と共に漸くあせて今は其の地には見られず、アナトリアの山深き所にはげしき浮世から逃れて今は其の存在さへも注意されて居ない」と云ふ様に美しく書かれた部分もある。本書は地誌の參考書たるばかりでなく、國民の讀本として適當なものである、世界の國々の現状を知らしめると同時に、各國の未來の盛衰を考察する資料となる好著である。(N)

○東京市郊外に於ける交通機關の發達と人口の

近代都市の發展は其の人口集中の勢の熾烈にして且つ急速なを特徴とする。寸時も已まない發展の力は遂に都市をして在來の行政區劃内に蹢躅するを許さないで、餘勢は郊外に追越し、近隣の町村を併せ率ゐて一大都市を形成させる様になる。而して大都市の範圍は交通機關の發達に伴ひ日を逐うて擴大する。由來人口の都市集中は交通機關の發達に頼つて此の傾向を激成したのであるが、聽て又人口を近郊に誘導するの交通機關である。この人口の増加と交通機關との關係を闡明ならしむることは都市行政、其の他諸般の施設經營上緊要なことであると同時に都市地理學の最大問題である。特に震災後の東京市は外延的伸展の勢力頓に強烈を加へ、近年に於ける近郊町村の發展は寔に目覺しいものである。本書は此の實狀に稽へ東京市郊外町村に於ける交通機關の發達と人口の増加との相關關係を考厥する資料として編成されたものである。第一章近郊町村に於ける人口増加の趨勢に於て大正十四年第二回國勢調査を最後のものとして過去に於ける集中を明にすると共に大正十四年の現狀を詳述してゐる。一般を抄するに大正十四年に於ける大東京（東京都市計畫區域であつて、其の範圍は東京驛を中心とし、半徑十哩の圓を描き、市内十五區と近郊八十四箇町村とを包容し面積五七〇方料あり）の人口は四、一〇九、一三三人であるが、其の内東京市の

人口は一、九九五、五六七人で、近郊町村の人口は二、一一三五四六人で近郊町村の人口は市内人口を少しく超越して居る之を大正九年の第一回國勢調査人口に比較すれば、當年の人口は東京市は二百十七萬餘人、近郊は百十八萬餘人、合計三百三十五萬餘人であつたが、市内の人口は震災の爲めに一時急激に減少し大正十二年十一月十五日の調査に從へば百五十二萬七千餘人となつたので、餘程恢復を見た大正十四年に於ても猶大正九年の九割二分を示すに過ぎない。然るに郊外人口に在りては當該兩期の比較は七割八分の増加となる。大東京圏内を一體として見るときは震災の一大異變に遭遇したにも拘らず、人口は遞増して前後五箇年間に二割二分四厘を増加したのである。此の五年間の増加を町村別に見ると荏原町の如きは七十四割八分の増加をなして居る。近郊人口の狀態を觀察する便宜上、本市に對する町村の位地乃至距離の遠近に依つて四圈區に分劃して説明されてある。第一圈は東京市を取巻いて居る十八箇の隣接町で、第二圈は第一圈の外廓を成す大井町以下の十六箇町村で、第三圈は第二圈を圍繞する入新井町以下の二十三箇町村で其の外方は第四圈に屬する。圈別人口を表示すると次の如くである。

| 圈區別 | 人口 | 大正十四年 | 大正九年に對する増減の割合 |
|-----|-------|-----------|---------------|
| 第一圈 | 密度 | 一、九九五、五六七 | 減 |
| 第二圈 | 一方料に付 | 二、四、五六五 | 減 |
| 第三圈 | | 八、二 | |
| 第四圈 | | | |

| | | | | |
|------|-----------|--------|---|-------|
| 第一圈區 | 九四五、一八四 | 一六、六〇三 | 增 | 四七二 |
| 第二圈區 | 六三八、九七六 | 七、九六六 | 增 | 一四一・四 |
| 第三圈區 | 三一二、三二九 | 二、〇二五 | 增 | 一一九・〇 |
| 第四圈區 | 二一七、〇五七 | 一、〇九七 | 增 | 六〇・三 |
| 近郊計 | 二、一一三、五四六 | 四、三二一 | 增 | 七八・四 |
| 總計 | 四、一〇九、一一三 | 七、二〇四 | 增 | 二二・四 |

この近郊の四圈區は人口現象の區分であるがあらゆる人文的區分とすることが出来るから、地理學的上有意義なものである。本書に添へられた人口密度分布圖を熟視すること、各圈區の説明を讀むことによつて經濟的事態を推知することが出来る。第二章は交通機關の發達を記述したもので、交通機關中主要なもの即ち鐵道、軌道、乗合自動車、乗合馬車及乗合蒸氣船の五種に限定してある。而して最新な數字は昭和二年七月現在に依つてある。交通機關に對する刻下の問題としては高速交通機關、乗合自動車の急激な發達などが概説されてある。第三章は人口の増加と交通機關の發達との關係で各交通機關の地理的勢力範圍を決定すること、困難である爲め各交通路線を中心として當該交通機關の敷設により町村人口の増加を誘致されたと看做し得べき行政區域の綜合を以て其勢力範圍と假定して兩者の關係を推考して居る。城南、城西、城北、城東及其の他に別ち之を主要鐵道軌道沿線に小別し、各町村の交通状態を記述してある。全體の結論を概記すると、東京近郊に於ける交通機關は地理的に見て南部より西

、北、東部に向つて順次に發達し又市域に接近する部分から次第に外延的に伸展したと見られる。之を機能的に見れば明治三十年以前の敷設に係るものは主として遠距離間の聯絡を目的とし、明治四十年以來最近の敷設に係るものは主として都心と近郊との間に於ける輸送を目的とする。然るにこの中間の明治三十年乃至明治四十年の敷設に係るものはこの遠距離及都郊輸送の兩々の目的を兼ね具へたものであつた。而して鐵道、軌道及乗合自動車の發達は震災以後特に著しく將來益發展すべき状態であり、乗合馬車は現今活躍の見るべきもなく、將來の衰滅に向つて居、乗合蒸氣船は活躍はしないが特立の地位を占めてゐるので將來に存続するであらう。猶高速の交通機關が低速のものに代つて來たがこの方は益發達してゆくことであらう。郊外の人口の増加は地理的に見て、荏原郡、豊多摩郡、北豊島郡に於て最も旺んであつた。南葛飾郡は右に次で盛であつたが今後の増加が著しからう。南足立郡、北多摩郡(千歲村、稻村)は増加振はざりしも震災後漸く増加力が旺んとなつた。又東京市の隣接町先づ増加し、次第に外方區域に増加した。交通機關と人口増加との相關々條の結論は次の如くである。(一)交通機關の設置乃至發達は人口の増加を招來する。(二)増加した人口は交通機關の伸展乃至發達を促す。(三)人口密度高き地域程其の附近に於ける交通機關は整備してある。(四)逆例鐵道、軌道の敷設は沿線の人口増加に先づ、乗合自動車、乗合馬車、乗合蒸氣船の施設は沿線の人口増加に後れる。(五)舊時の交通機關の發達は

地方人口を驅つて本市に集中させた。(六)近時の交通機關の發達は前項の機能を有すると共に併せて市内人口を郊外に分散させようとする。(七)人口の増加と交通機關の發達との數字的推移は趨向を同じくするが、然し人口の増加は交通機關の發達よりも著しく高率である。

本書は都市地理學者に取つては著しい資料を供するものである。若し夫れ本書には未だ出來てゐない交通機關の地理學勢力を決定することは地理學者の手を待たねばならぬものと思へる。(S)

○臺灣山岳(新高山集)

昭和三年七月 臺灣總督府文書課内臺灣山岳會 定價一圓六十錢

臺灣山岳會の機關誌臺灣山岳の第三號は新高山集として日本第一の高山である新高山に關する記事を滿載してゐる。本文として「新高山探險の懷古」「新高山藥の動物學的研究」があり、雜録には内に十篇の新高山登山記、蝶類等の記事がある。圖版十葉ありて新高山の偉容を紹介してゐる。記事は重複した點も多く編纂は雜然たるものであるが新高山の真相を知らんとする人士又は新高山登山を企てんとする山岳家にはよき手引とする。(S)

○朝鮮氣溫表

朝鮮總督府觀測所 三四三頁 昭和三年三月

朝鮮總督府觀測所(仁川)、鮮内各測候所を始め府、郡、島嶼、各道種苗場、燈臺、專賣局出張所及農場等百六十八個所

に於ける氣象觀測開始以來大正十四年に至る氣溫並に霜雪の季節等を集め編纂したもので首に非常に明瞭な多數の氣溫圖を掲げてある。それは鮮内各地の觀測地一覽圖各月平均氣溫圖、各月平均最高氣溫圖、每月平均最低氣溫圖、年平均氣溫圖、年平均最高最低氣溫圖、最高極最低極氣溫圖、一月及七月平均較差圖、初霜終霜同期線、初雪終雪各同期線、氣溫比較圖(東亞に於ける)等合計五十葉の氣象圖を載せてゐる。本圖は斯道に於ける實に貴重な圖で今日迄如斯多くの觀測地點と觀測期間の比較長期に渉る材料に據り作製せられたものはなかつた。それが専門家の手に依つて朝鮮全體出來上つたのは誠に喜ぶべき事で研究上重要な參考資料たる事言ふ迄もない。統計表は圖表にある要素全部を擧げた外、時刻別月平均氣溫、最高最低平均の各氣溫が或溫度より大小なりし日數表江河稻米期日等につき各地觀測候に於ける詳細なる表を擧げてある。かく朝鮮に於ける氣溫の總てを網羅してあるから朝鮮氣溫に關しては、此の書を置いて外に及ぶべきものはない。希くは今後引續き氣象の各要素全部に互り同様な刊行物の發行されん事を。(吉田)

新著即報

○東京帝國大學地震研究所叢報 第五號 八月 昭和二年十月二十七日長岡市西方の強震調査報告(松澤武雄)

關東大地震並に丹後大地震に表はれたる斷層の横すれに就

いて(今村明恒 岸上冬彦)

奥丹後半島の地形發達史(多田文男)

○富士の地理と地質 石原初太郎 九月 古今書院 定價四

圓二十錢

○朝鮮鐵床調査要報 第四冊ノ一 八月 朝鮮總督府地質調

査所

慶尙南道統營郡光道面竹林里だいあすばーあ鐵床調査報文

(木野崎吉郎 田村龜太郎)

○國立北京大學地質研究會刊 第三期 七月

中國北部水平動所成之構造(翁文灝)

China in the Ordovician Period (A. W. Grabau)

中國沿海地帶之地文變遷(黃汲清)

北京西山輝綠岩之研究(朱森 黃汲清)

北京西山周口店花崗岩之研究 楊曾威)

湖南郴縣瑤林地質(朱森)

北京西山楊家屯地層之考查(楊曾威 李春昱 黃汲清 朱森)

熱河朝陽縣北票興隆溝及楊樹溝一帶地質報告(朱森 楊曾

威 黃汲清 李春昱)

山東地質旅行報告(朱森 李春昱 楊曾威 黃汲清)

撫順煤礦考查述略(張子烈)

○The Pressure of Population in Japan (John E. Orchard) Geogr. Review XVIII, 3, July, 1928.

○地理學評論 第四卷九號 九月

我邦に於ける氣候分類に就きて(福井英一郎)

支那の農業經濟地理(佐々木彦一郎)

樺太入移民の經濟地理學的考察(上)(武見芳二)

○東洋學藝雜誌 第四十四卷九號 九月

日本産石炭の構造に就て(保井ユウ)

信濃中部第三紀末より第四紀末に亘る地殼運動(本間不二

男)

○鹿児島縣博物調査 第三輯 八月 鹿児島縣教育調査會

トカラハブとエラブウナギ(永井龜彦)

第六章 寶島、小寶島の地形、地質及び生物——附錄

一 硫黃島の地形につきて)

○昭和三年特別大演習地方圖(十萬分ノ一)三色刷(主に盛岡

黒澤尻間の北上川西方地域) 九月 陸地測量部 二〇錢

○昭和三年特別大演習地圖(五萬分ノ一) 二葉(區域前項の

地方圖に略同じ) 九月 陸地測量部 四五錢

雜報

○北京及直隸省の改稱

支那の爭亂先づ一段落つき國民軍の北京入城によつて全支那統一の緒に就き其の一步として、六月廿日國民黨中央政治會議で北京を北平に、直隸省を河北省に改め、天津を特別市となす事を議決した。

此等の改名は歴史的に關係あるもので河北の名が歴史に表はれたのは、遠く唐時代に遡る。讀史方輿紀要に曰く。唐分十道此爲河北道、天寶以後強藩往往竊據焉。(中略)宋仍爲河